In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	『権中納言実材卿母集』の長女哀傷歌群について
Author	金光, 桂子
Citation	人文研究. 53 巻 4 号, p.1-19.
Issue Date	2001-12
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

人文研究　大阪市立大学大学院文学研究科紀要
第五十三巻　第四分冊　二〇〇一年十二月　一頁～十九頁

『権中納言実材卿母集』の長女哀傷歌群について

金光桂子

一　実材母とその周辺

宮内庁書陵部に伝わる『権中納言実材卿母集』（以下、『実材母集』と略称）[1]は、桂宮本叢書に翻刻されて以来、主に『源氏物語』をはじめとする王朝物語の受容資料として、また、中世の女性私家集としては大部のものであり、しかも日常生活での詠を豊富に持つ点で注目されてきた。[2]

作者実材母の伝記については、この家集自体がほぼ唯一の資料であるため、不明な点も多いのだが、井上宗雄氏が詳細に考証しておられる[3]ので、それに従って概略を記しておく。実材母は「舞女」（白拍子）の出身で、平親清の妻となったが、やがて西園寺公経の寵を受けて一男一女を産む。公経没後は親清と復縁し、その間に一男五女をもうけた。生存年代は十三世紀初頭から終わりにかけて、建保頃から正応頃までと推定されている。

平親清は桓武平氏高棟流、民部卿親範の孫で、武家化して幕府の御家人となり、十三世紀の中頃、若狭守護代を務めたほか、六波羅や鎌倉でも活動していた。[4]『続古今集』以下に入集する「平親清女」は、親清と実材母との間に生まれた次女か三女、『続拾遺集』以下に見える「平親清女妹」は、同じく四女を指すらしい。また四女と五女には、『平親清四女集』『平親清五女集』[5]という私家集が、やはり書陵部に伝わっている。天理図書館蔵『藤原政範集』[6]の作者もこの一家の近親者と推測され、併せて一族の盛んな和歌活動を窺うことができる。

一方の西園寺公経（一一七一～一二四四年）は、鎌倉将軍家との姻戚関係によって出世し、承久の乱以後は摂関をも凌ぐ権勢を振るい、太政大臣に至った人物である。公経との間に生まれた男子が実材で、中納言にまで昇進したが、文永四（一二六七）年二十九歳で没した。女子は、後嵯峨院に出仕して大納言二位と呼ばれた女性である。

二　『実材母集』の構成

現在『実材母集』の伝本は、書陵部蔵本が唯一のものである。[7] その書陵部本には、歌集の所々に空白の行がある。桂宮本叢書・私家集大成の翻刻に明示されているが、たとえば七六・七七の間に二行分、九六・九七の間に一行分といった具合に、一行ないし七行分の余白が随所にあり、それによって歌集全体がいくつかの歌群に区切られているのである。次頁に、その様態を一覧できる形で示してみた。空白行によって分けられたそれぞれの歌群にＡＢＣ…の記号を付し、その中に含まれる歌の番号と内容の概略を記している。

そのうち二つ目の歌群Ｂは、それぞれ一行分の空白によって六つの部分に分かれているのだが、次に述べるような理由によりこの六つで一つの歌群であると考え、①から⑥までの番号で細分しておいた。それぞれの歌の内容を見ると、①は春の歌ばかり、以下②夏③秋④冬と、四季の季節ごとに分かれている。しかも、たとえば①の春の歌群であれば、立春の歌（七七～八〇）にはじまって、子日（八一・八二）・若菜（八三～八六）…と続き、惜春（九六）に至るというように、勅撰集と同様の時間的配列で並べられている。以下、夏・秋・冬の歌群についても同じことがいえる。続いて⑤は恋の歌、⑥は懐旧・釈教・神祇など、広く雑の部に分類される内容の歌から成り立っている。つまり、①～⑥はそれぞれ春・夏・秋・冬・恋・雑という部立に相当することになり、この六つを併せた歌群Ｂは、本来それだけで小規模ながら一つの歌集としてまとめられたものだったかと推測されるのである。

ただ、Ｂ⑥の末尾に位置する一四九～一五四の六首は、この小歌集の構成から逸脱しているように見える。それらはすべて、作者と「弁内侍殿」との贈答歌である。

おり〳〵かきあつめて侍りし物どもを、弁内侍どの、もとへ

つかはしたりしかば、かくよみてをこせられて侍りし

かず〳〵にたまをつらねてみゆるかな花にも葉にもみがくしら露　（一四九）

返し

にほひなくしぼめる花の下つゆもたまとみがける君がことのは　（一五〇）

又、弁内侍殿

われもいまふりぬる雨はつらけれど雲のかへしのかぜぞ身にしむ　（一五一）

かへし

たれもげにふりぬるあめのうき雲をなを吹かへすかぜぞみにしむ　（一五二）

れうしを三十帖つかはして侍りし返事に、おなじ人

わかのうらやみそもじといふことのはをこのかずごとにかきやつくさん　（一五三）

かへし

そのかみやいま行すゑもわかの浦のたまものかずはかきもつくさじ　（一五四）

『権中納言実材卿母集』の構成

〈上巻〉

A 1～76 伊予・三島神社参詣
親清との交渉
公経死去……寛元二（1244）年
実材死去……文永四（1267）年
大納言二位出家
……文永九（1272）年
親時死去
美濃・横蔵寺参詣
（二行空白）

B
① 77～96 春
（一行空白）
② 97～105 夏
（一行空白）
③ 106～117 秋
（一行空白）
④ 118～124 冬
（一行空白）
⑤ 125～133 恋
（一行空白）
⑥ 134～154 雑
弁内侍との贈答
（二行空白）

C 155～201 娘たちとの交流
探題歌
親清死去
（三行空白）

D 202～294 東国下向
長女死去
出家
弁内侍との贈答
（四行空白）

E
① 295～314 春二十首
※
② 315～324 夏十首
（二行空白）
③ 325～344 秋二十首
（二行空白）
④ 345～354 冬十首
（二行空白）
⑤ 355～374 恋二十首
（一行空白）
⑥ 375～394 雑二十首

百首歌

※314と315の間には空白がないが、小字で「夏」と補記されている。

〈下巻〉

F 395～423 三百六十首続歌
（七行空白）

G 424～433 熊野三所権現奉納十首歌
（二行空白）

H 434～461 七夕三首歌
百首続歌
源氏巻名続歌
（二行空白）

I
① 462～515 春
（一行空白）
② 516～539 夏
（一行空白）
③ 540～584 秋
（一行空白）
④ 585～610 冬
（一行空白）
⑤ 611～656 恋
（一行空白）
⑥ 657～717 雑
天神観音三十三首歌
（二行空白）

J
① 718～804 探題歌
② 805～837 近親者との交流
おととむすめ死去
上京……弘安十（1287）年頃
藤原隆博との贈答
③ 838～887 釈教歌

「弁内侍殿」とは、藤原信実女で、『弁内侍日記』を残した後深草院弁内侍のことであろうが、作者とどのような関係にあったのかは不明。その弁内侍に「おり〳〵かきあつめて侍りし物ども」を遣わしたというのは、おそらく折に触れて詠んだ和歌を送ったのであろう。そして他人に見せる以上、それは単に雑然と詠草を集めたものではなく、ある程度整理されたものだったとすれば、小歌集の体裁を備えていた歌群Bの①～⑥、ちょうどこの一四九の直前までの部分が、それに該当するのではなかろうか。

一四九は送られた和歌に対する弁内侍の賛辞、一五〇は作者からの返礼、一五一・一五二もそれに引き続く贈答である。次の一五三の詞書には、作者が弁内侍に料紙を三十帖送ったとあり、歌によればそれは和歌を書くための料紙だった。つまり、自分の詠歌を弁内侍に見せた実材母が、今度はあなたの歌を書いて見せてくださいというつもりで料紙を送った、といういきさつが想像される。このように、一四九～一五四はすべて、「おり〳〵かきあつめて侍りし物ども」に関連する贈答歌だったと解される。そしてその六首を「おり〳〵かきあつめて侍りし物ども」の最後に記し付けておいたのが、現在見られる歌群Bの形なのではなかろうか。歌群Bの末尾に小歌集の構成から外れる六首があるのは、それらがこの小歌集自体にまつわる贈答歌だったからなのである。

これに似た事例が、『建礼門院右京大夫集』[8]にも見られる。その末尾部分は、「返返うきよりほかのおもひいでなき身ながら、としはつもりていたづらにあかしくらすほどに、おもひいでらるる事どもを、すこしづつかきつけたるなり…」ではじまる跋文に続いて、

くだきけるおもひのほどのかなしさもかきあつめてぞさらにしらるる　（三五九）

と、自撰の集を読み返しての感慨を詠んだ歌を記した後、さらに、

老ののち、民部卿定家の、うたをあつむることありとて、かきおきたる物やとたづねられたるだにも、人かずにおもひいでていはれたるなさけ、ありがたくおぼゆるに、いづれの名をとかおもふととはれたる、おもひやりのいみじうおぼえて、なほただへだてはてにしむかしのことのわすられがたければ、その世のままになど申すとて

ことのはのもし世にちらばしのばしきむかしのなこそとめまほしけれ　（三六〇）

かへし　民部卿

おなじくは心とめけるいにしへのその名をさらに世にのこさなん　（三六一）

とありしなん、うれしくおぼえし

という二首でもって閉じられている。三六〇・三六一は、よく知られているように、右京大夫がこの歌集を『新勅撰集』の撰集資料として藤原定家に提出した際、その作者名をめぐって定家と交わしたもので、この歌集自体にまつわる贈答歌として末尾に付け加えられたものであろう。それと同じような事情が、実材母集の歌群Bについてもいえる

のではなかろうか。

『実材母集』の成立事情は、自撰か他撰かを含めて未詳である。個々の歌群を集めて現在の形にまとめたのは後人の所為という可能性もあるが、日常生活における詠歌に付された詳細な詞書は本人の手になるように思われるし、今検討した歌群Bなどは、歌詠み仲間同士で見せ合うために、作者自身が歌集の形に編んだものだったのだろう。

もっとも、他のすべての歌群について、小歌集と呼べるほどの統一性が見られるわけではない。たとえば冒頭の歌群Aには、親清との交渉、公経・実材との死別等、作者の人生の比較的早い時期における詠歌がおおよそ年代順に並んでおり、若き日より詠みためてきた歌をある時点でまとめたものと思われるが、構成はやや散漫である。また、百首歌（E）・探題続歌（F・H）などの題詠歌を収めた歌群は、詠草そのままの姿に近く、作者の編纂意識のようなものは特に窺えない。

しかし実材母は、歌群Bのような小歌集をまとめる試みを、その後も何度か行ったようである。一四九～一五四同様、作者が自分の詠んだ歌を人に見せた折の贈答歌が、集中に他に二例見出せる。そのうちの一つは、下巻の最後の歌群Jの中にある。

むかしの歌どもをかきあつめてつかはして侍しかば、九条二品

のこしをくこと葉の露のさまゞ〳〵にむかしをかけてぬる、袖かな　（八三六）

返し

さらに又むかしをかくることの葉につゆぞこぼる、すみぞめの袖　（八三七）

「九条二品」は、『続古今集』撰者の一人であった藤原行家の息で、自らも永仁勅撰の撰者の一人に予定されていた、藤原（九条）隆博である。その隆博に遣わしたという「むかしの歌ども」も、やはり小歌集の形式に「かきあつめ」たものだったのではなかろうか。しかし、それが現存する『実材母集』のいずれの部分に該当するのかは、歌群Bほど分明でない。構成表に示したように、歌群Jは①探題歌②日常生活詠③釈教歌という三つの部分から成り立っており、八三六・八三七は②の最後に位置している。「むかしの歌ども」が直前のJ①②（あるいは②のみ）を指すとすると、「むかし」にやや違和感があるし、歌集としてのまとまりにも欠けるようである。むしろ、その一つ前の歌群Iが、歌群Bと同じく四季・恋・雑の部立構成を取っていることから、これが隆博に送られたものかとも思われる。あるいは、歌集の冒頭からここまでの全体という可能性も考えられよう。いずれにせよ、昔の歌の数々を整理して人に見せるという営みを、実材母が晩年にも行っていたことは確かである。

あと一つの例は、歌群Dの末尾近くに見える。歌群Bの場合と同じく弁内侍との贈答歌である。

このうたどもを見て、弁内侍殿

みづくきのあとをあはれとみるからにわがなみださへかきぞやられぬ　（二九二）

かへし

よそにさへあはれをかくる水くきのあとになみだぞいまもながる

（二九三）

ここには「かきあつめ」「つかはし」といった言葉はないが、「このうたども」という以上、弁内侍の見たものがその直前の二九一までの歌々だったことはまちがいない。さらに、この歌集伝本の形態上の特色を勘案すれば、それは歌群D全体だったと考えるのが最も自然であろう。

歌群Dは、歌群Bや歌群Iのように、四季・恋・雑の部立構成を備えた、勅撰集に倣う形式の小歌集というわけではない。しかし、それを弁内侍に見せたのだとすれば、単に日々の詠草の寄せ集めだったとは考えにくい。むしろ歌群Dは、ある主題のもとに編纂された、歌群Bや歌群Iとはまた違った形の小歌集と呼ぶべきものであるように思われる。以下、歌群Dを読み進めながら考察してみたい。

三　東国下向の旅と長女の死

歌群Dは、次のようにはじまっている。

ある人の、たゞすのやしろにこもりて、なき名うれへ侍りしにかはりて、よみ侍ける

いつはりをそらにたゞすの神ならばあとなき雲のゆくゑあらはせ[9]

（二〇二）

おもふ事侍りしころ、あづまのかたへおもひたち侍しに

うしとのみ思たちぬるたびごろもきてはうらみの日数へだつな

（二〇三）

あつたのおまへをすぐとて

おもふことなるみのうらの神がきにたのみをかくるなみのしらゆふ

（二〇四）

二〇二は、糺の社、すなわち下鴨社に籠って無実の罪が晴れるよう訴えた「ある人」に代わって、正しい裁きを神に祈願する歌。おそらく神社に奉納されたものであろう。続く二〇三では、作者は東国への旅に出立している。そして以下、熱田宮（二〇四）、鳴海潟（二〇五）、二村山（二〇六）、八橋（二〇七・二〇八）、浜名橋（二一一・二一二）、宇津山（二一三・二一四）、清見関（二一五）、田子浦（二一六・二一七）、富士山（二一八・二一九）、浮島原（二二〇）、三島社（二二一）、箱根山（二二二）と、東海道を下る道中での詠が二十首ほど続く。従って、一見冒頭の二〇二が孤立しているように思われるのだが、その点については後述することにして、まず旅の歌群を見ておこう。

この旅の歌群に特徴的なのは、二〇三の詞書に「おもふ事侍りしころ」とあり、和歌の方でも「うしとのみ思たちぬる」「うらみ」と詠んでいるように、作者がかなり強い憂悶に捉われていることである。また熱田宮における二〇四では、「おもふことなるみ」「たのみをかくる」と詠み、神に願い事の成就を祈っている。地名「鳴海」に「成る」を掛ける詠み方は特に珍しいものではないが、通りかかった神社を儀礼

的に礼拝したというだけのことではなく、具体的に「おもふこと」があっての祈願のように思われる。

その後も、「やつはしをいまはひとつにわたしてもなをやくもでにものを思はん」（二〇七）「ふじのねの雲にあらそふけぶりにもなをたちまさるわがおもひかな」（二一八）等、旅愁にとどまらない物思いが詠まれてゆく。田子浦では、

たごのうらをとをるほど、あまの子どもの侍しを見て、いかゞ思けん

しほたるゝあまの袖にもかくばかりたごのうらみのなみはかけじな（二一六）

はるゞゝとおひのなみぢにたちいで、かひあるうらをみるよしもがな[10]（二一七）

と、やはり地名「田子浦」に掛けて「うらみ」と詠み、「かひあるうらをみるよしもがな」と願う。高齢を押しての東国下向には、何か期するところがあったのだと考えざるを得ない。

伊豆の三島社は、伊予国一宮の三島社（大山祇神社）と同じ名であるため、母方を通じて伊予の地に関係のあったらしい作者にとってはとりわけ馴染み深い社であったが[11]、そこでも次のように祈願を込めている。

いづのみしまにまうで、侍しに、いよにてつねにまいりなれにしかば、なつかしうおぼえたまふに、神さびにける松かぜのをともみにしむ心地して

いづくにもおなじみしまの神なればたのみをことにかくるゆふしで（二一一）

続いて、旅の歌群の最後になるが、箱根権現を礼拝してもやはり「思ふこと」があったという。

あしの海のいり江にしげれるあしのねざしも、いとおかし、はこねのをやまをふしおがみたてまつるにも、思ふこと侍りて

みたらゐにおひはじめけるよしあしのもとのねざしは神ぞしるらん（二一二）

「よしあし」は「葭・葦」に「善し悪し」を掛けており、その根本をただして照覧あるよう神に願っている。この歌から推測するに、これまで「思ふこと」「うらみ」と繰り返し表現されてきた作者の鬱屈は、神に理非善悪の判断を仰ぐような類のもの、すなわち何らかの訴訟・裁判に関わるものだったのではないかと思われる。

夙に千葉覚氏が、この旅の歌群について同様の推測をされていた[12]。そしてそこで引き合いに出されたのが、『十六夜日記』[13]の作者阿仏尼である。鎌倉時代、訴訟のために東海道を下り、その道中の記をしたためた女性というと、当然想起される名であろう。夫藤原為家の死後、細川荘の相続をめぐって我が子為相の権利を守るべく継子為氏と争い、幕府の裁決を仰ぐため鎌倉に下った阿仏尼は、やはり熱田宮や三島社で勝訴を祈願する歌を詠んでいるが、その中には実材母の歌と類想のものもある。

・熱田宮

祈るぞよわが思ふこと鳴海潟かた引く潮も神のまに〳〵

鳴海潟和歌の浦風隔てずは同じ心に神も受くらむ

満つ潮のさしてぞ来つる鳴海潟神やあはれとみるめ尋ねて　（一八八頁）

・三島社

あはれとや三島の神の宮柱たゞこゝにしもめぐり来にけり

をのづから伝へし跡もあるものを神は知るらん敷島の道

尋ね来てわが越えかゝる箱根路を山のかひあるしるべとぞ思ふ　（一九四頁）

また田子浦での作は、『実材母集』二一六と同じく、「恨み」を詠み込んでいた。

今日は日いとうらゝかにて、田子の浦に打出づ。海人どもの漁するを見ても、

心からおり立つ田子の蜑衣乾さぬ恨みと人に語るな

とぞ言はまほしき。　（一九四頁）

このように『十六夜日記』と比較してみると、実材母の関東下向の目的が何らかの訴訟に絡んでいたという可能性は、かなり高いように思われる。一口に訴訟といっても様々あろうが、この時代わざわざ東国まで下るからには、そしてその目的地がおそらく幕府のある鎌倉であったとすれば、やはり阿仏尼の場合と同じく所領にまつわる相論だったのではなかろうか。細川荘の場合と違って史料的な裏付けは全くないに等しく、類推の域を出ないものの、十分あり得ることであろう。

以上のように考えれば、先に保留しておいた、この旅の歌群と歌群Dの冒頭の一首との間の脈略が、少し見えてくるようである。冒頭の二〇二は、濡れ衣を着せられた人の代わりに正しい裁きを神に求める歌、つまり訴訟にまつわる歌であった。この歌は、その後に続く東国下向の旅がいかなる性格のものであるのかをあらかじめ暗示する、いわば序の役割を果たしているのではなかろうか。

所領をめぐる訴訟のような事柄について、女性が仮名文で具体的に記すことは容易でなく、「思ふこと」「うらみ」といった語で漠然と表現するのが限度だったのであろう。『十六夜日記』でも、相続問題や訴訟の経緯については、「深き契を結び置かれし細川の流れも、故なくせきとゞめられしかば」「東の亀の鏡に映さば、曇らぬ影もや顕はるゝと」（一八二～三頁）等、縁語仕立ての雅文調で簡単に触れるだけである。『実材母集』では、他人の事件とはいえ裁判沙汰に関わる二〇二の歌を冒頭に置くことによって、この旅の背後にあった訴訟という事態を、それとなく浮かび上がらせているのではなかろうか。さらに想像を逞しくすれば、二〇二を代詠とするのもカムフラージュであって、実はまさにこの旅の原因となった訴訟に関わって、実材母自らが奉納した歌だったのかもしれない。その是非はともかく、歌群Dの冒頭の一首と旅の歌群とは、訴訟にまつわる詠歌という点で密接につながっていたのである。

さて、実材母の旅の理由であったと思しい訴訟がどのようないきさつで生じたものなのか、現時点では不詳というほかないが、関係した人物については歌集から推測可能である。歌群Dを続けて読んでいくと、二二三の詞書に「おなじみな月のすゑつかた、むかしすみなれ侍しふるさとにたちかへりたりしほど、いとあはれなる事おほくて」とあり、ここで旅が終わっている。[14] そしてその翌年のことであろうか、三月頃、作者は「あねむすめ」（親清との間の長女）死去の報に接する。

やよひのころ、あねむすめなくなりにけるよしき、侍りしかば、ちかごろかたみにうらむる事の侍りしも、みなわすられて、かなしともいはんかたなし

きくもうしやよひのそらの夕かぜにさそはれにけるはなのおもかげ　（二二六）

突然の訃報がもたらされたこの「あねむすめ」との間に、「ちかごろかたみにうらむる事」があったという。その「かたみにうらむる事」というのが、実材母が道中の詠でしばしば詠み込んでいた「思ふこと」「うらみ」だったのではなかろうか。

すでに千葉氏も、この詞書に基づいて、「長女との間に鎌倉へ赴かせる程こじれていた問題があったかもしれない」と推測されていた。もっとも一方で、「土地所有問題とは直接関係はないかもしれないが」と慎重な態度でおられるのだが、以下のような傍証により、氏の推測を支持しておきたいと思う。その一つは、直前の歌群Cにおいて、作者の夫親清が亡くなっていることである。これは状況証拠にとどまるが、親清の死去に伴って、その遺した土地の相続をめぐり、遺族の間でもめ事が起こったとしても不思議ではない。

次に、実材母が田子浦で詠んだ二一六を今一度見てみると、その第四句の「たごのうらみ」が「田子浦」と「恨み」との掛詞であることは明らかだが、より正確には、「子の恨み」を掛けているのではなかろうか。[15] しかも詞書を見ると、『十六夜日記』のようにただの「海人ども」ではなく、ことさらに「あまの子どもの侍しを見て」とあること、また、その「あまの子ども」を見て何か思うところがあったこと、しかもその自らの心の動きを「いかゞ思けん」と朧化していること、これらはすべて、作者が我が子との確執を背負っていたことを反映しているように思われる。

歌群Dは、二二六以下ほぼ最後まで、長女の死を悼む歌で占められているが、叙上のように、実材母の東国下向のきっかけが長女との訴訟沙汰にあったとすれば、旅中詠と哀傷歌とから成る歌群D全体が、亡き長女への思いというテーマで貫かれていると読めるだろう。本稿の標題に「長女哀傷歌群」と掲げた所以だが、この哀傷歌群は、娘の死を悲しむ歌のみでは不十分だった、作者としては、それに先立つ母娘の確執にも触れておく必然性があったのだと思われる。そのことを確かめるために、以下哀傷の歌を見てゆきたい。

四　悲嘆の日々

訃報を受けてからしばらく経った頃、作者の夢に亡き長女が現れた。

ありしながらのさまにて、夢にみえ侍りしかば

うきことをかたりあはするほどもなくさめてくやしきゆめのおもかげ　（二二三二）

この夢の中で、娘が成仏できず苦しんでいる様子でも見えたのだろうか、作者は泣く泣く供養を営んでいる。

いかなるやみにまよふらんと思やるもかなしうて、なく〳〵とぶらひ侍とて

しづむらんうきせにながすなみだをもみのりの水にまかせてぞとふ　（二三三五）

長女の霊が闇路に迷っているという趣旨の歌は、次に挙げるように、その後もしばしば詠まれている。

四十九日に、はらからども誦行などをくりたりしも、いとあはれにて

さきだちしあとゝふ今日のみのりこそくらきやみぢの光なるらめ　（二二五七）

又ある人のもとより

君がとふ今日のみのりのかねのをとにまよひしほどの夢やさむらん　（二二五八）

返し

ねをそふるみのりのかねのひゞきにやつきせぬゆめをおどろかすらん　（二二五九）

おなじ夜、おもひけることゞもをかきつゞけて、おとゝむすめ

しるべせよくらきやみぢにまよふともこよひかゝぐるのりのともし火[16]　（二二七三）

もちろん、死者が冥途をさまよい苦しんでいるのではないかという懸念は、遺族ならば誰しも抱くものかもしれない。しかしこの長女の場合、近親者の間でその不安はほとんど確信のようになっていたように思われる。そしてその懸念は、ずっと後年まで続くことになる。次に挙げる歌は、長女が亡くなってから八年ほど後のものである。

或人の夢に、なくなりにしあねむすめ[17]、はゝにかくなんつたへよと申侍りける

夕つゆにいとゞひがたきそでぞとはいづれの秋にならひそめけむ　（六八八）

これをきくに、いとかなしうおぼえて、経仏などくやうし侍とて

なき人の袖もひがたき露きえてあとゝふのりのたまやかくらん　（六八九）

「或人」の夢に現れた長女の霊は、いまだ成仏できない苦しみを、母に訴えているのであろう。それを伝え聞いた作者は、再び供養を営んでいる。もとよりこの「或人」の夢にせよ、二三三二の実材母の夢にせよ、死者が浮かばれていないのではないかという懸念が生者の側にあったからこそ、その心の鬼がこのような夢となって現れたのであろう。

実材母やその周辺の人々がそうした危惧を抱くに至ったのは、やはり長女が母親との間に、「かたみにうらむる事」という妄念を抱えたまま死んでしまったからなのではなかろうか。

作者はこれ以前に、親清との間の息子親時にも先立たれていた。その親時の最期は、長女とは対照的に穏やかなものだったらしい。

をはりのしづかなりし事ぞ、心やすく思ひいでられける

いまは、やさとりの花もひらけぬとおもひやるにぞ露もなぐさむ（五八）

残された母親が深く嘆いたのはもちろんだが、静かな臨終を思い出して、もはや悟りを開いて成仏したであろうと想像することが、せめてもの慰めであったという。また、長女が亡き親時を夢に見たこともあった。

そのころ、うたゝねの夢に、母のすゝめしのりのしるべに、くらきやみにもまよはぬよしつたえよと、さやかにみえけるとかたり侍て、あねむすめ

これこそはかた見なりけれ春のよにはかなくつぐる夢のことづて（六六）

のりのみち君がをしへにまかせてやながきやみにもまよはざるらん（六七）

返し

はるのよのはかなき夢のことづてをつてにきくこそかなしかりけれ（六八）

たのもしなをしへののりのともし火の光に道もまよはざるらん（六九）

詞書に引用された親時の伝言や、長女と実材母が詠み交わした六七・六九の歌にも明らかなように、親時は死後も安らかな道に赴いたらしく、それも母の教えに従って仏道に帰依したおかげだという。母の導きで成仏できたと喜ぶ親時と、おそらく母との確執が原因で死後何年も苦しんでいる長女と、二人とも同じように母への伝言を夢で託していながら、その内容は正反対だった。かつて親時の夢を見たのがまさに長女その人であったというのも皮肉な話だが、ともあれ作者にしてみれば、同じ我が子とはいえ、自分への恨みを含んだまま世を去った長女に対しては、とりわけ不憫でやりきれない思いが残ったにちがいない。

その思いが、この長大な哀傷歌群を生み出したのだろう。実材母は、これまでに何度も親しい人々との死別を経験してきた。まず西園寺公経と死に別れ（二〇～三二）、ついで二人の息子、実材（三六～四九）と親時（五六～七一）に先立たれ、さらに夫親清とも死別した（一七一～二〇〇）。もちろんそのたびに彼女は深く悲しみ、痛切な嘆きの歌を詠んでいたが、その中でも長女への哀傷の歌群は、三回忌に至るまでという期間の長さからしても、約六十首という量からしても、他の誰の場合にもまして大規模なものである。

特に、長女が亡くなったのは春も終わりに近い三月だったにもかかわらず、その後、春の間の詠歌が三十首ほども続いている。生前長女が住んでいたところにいる「おひあま」――長女の乳母のような立場

の人物であろうか――から、次のような消息が届いたこともあった。

かのすみ侍しかたのはるのかきね、いつしかあれゆきて、いけの水にもむかしのかげはうつらぬかなしさなどいひて、そこに侍るおひあまのもとより

おなじ色にさくもかなしき花なれどは、のこりてや春をかさねん　（二四七）

この歌を見た作者は、長女の旧邸に例年のごとく咲く花を思いやり、次のように詠んでいる。

うへをきしにほひかはらずさきにけるはなの色さへつらき春かな　（二五二）

続いて、

ゐでのさとの山吹をうつしうへて侍りしを、思やりて

うつしうへしゐでのやま吹あはれともいはで露けき色やみゆらん　（二五三）

松にかけたりしふぢもやう〳〵さかりにこそなど、思やられて

まつがえにちとせをかけしふぢなみのさきだつ春の色ぞかなしき　（二五四）

なでしこをうへてみ侍し事を

あやなくも色しあせぬるなでしこの露やをくるゝなみだなるらん　（二五六）

と、春から夏にかけての花々へ思いが及んでいる。長女はいたく花を愛する人だったようで、多くの草木を前栽に植えていたらしい。

ところで、二四七の詞書に書き留められた消息に、「はるのかきね、いつしかあれゆきて」とあったが、おそらくこの時書き手が念頭に置いていたであろうもの、かつ受け取って読んだ側も想起したにちがいないものは、『源氏物語』[18]幻巻の一節、亡き紫の上が生前丹誠込めた春の庭を、光源氏が眺める場面である。

ささらぎになれば、花の木どもの盛りになるも、まだしきも、梢をかしく霞みわたれるに、かの御形見の紅梅に、鶯のはなやかに鳴き出でたれば、立ち出でて御覧ず。

植ゑて見し花のあるじもなき宿に知らずがほにて来ゐる鶯

……（中略）……

山吹などの、ここちよげに咲き乱れたるも、うちつけに露けくのみ見なされたまふ。ほかの花は一重散りて、八重咲く花桜盛り過ぎて、樺桜は開け、藤は後れて色づきなどこそはすめるを、その遅く疾き花の心をよく分きて、いろいろを尽くし植ゑおきたまひしかば、時を忘れずにほひ満ちたるに、…

……（中略）……

今はとてあらしや果てむなき人の心とどめし春の垣根を　（六―一三四～六頁）

桜・藤・山吹といった春の花を愛し、多く移し植えたまま世を去った長女、しかもその春真っ盛りの死は、同じように春の庭を賞美した紫の上を、おのずと思い起こさせたのであろう。[19]

幻巻では、春正月から年の暮れまで、月を追い季節を追って、多くの和歌を織り交ぜながら紫の上の追悼がなされてゆく。それに倣うかのように、実材母が長女を悼む歌も、これ以後季節の運行に沿って続いてゆく。二五六の撫子の歌はすでに夏に入っているのであろうし、「四十九日」（二五七～二六一）は四月下旬ないし五月初めにあたる。以下、「五月五日」（二六二～二六四）、「みな月にも成ぬれば」（二六七）、「秋にもなりぬれば」（二六八）、「七月七日」（二六九～二七一）、「七月十四日夜」（二七二～二七四）、「八月十五夜」（二七六・二七七）、「あきのすゑつかた」（二七八～二八一）といった具合に、三月から秋の末九月まで、約半年間であるが、ほぼ毎月にわたって哀傷の歌が綴られてゆくのである。

やがて作者は病に陥った。それも命に関わるほど重いものだった。そして、幻巻の後に出家したとされる光源氏と同じく、作者も出家を決意し、実行するに至ったらしい。

やまひ大事に成て、さまかへむと思たちけるころ、よみて侍ける

あまを舟なをのりやらぬこゝろこそうきよのきしをはなれざりけれ[20]（二八二）

実材母が出家を志したのは、今回が初めてではない。まず公経に死に別れた時には、「たゞならぬ身のありさま」（二二）つまり懐妊中だったため、周囲から出家を止められた。出産を終えた後、再び「いまはさはりなくほいもとげなん」（二二）と思い立ったが、やはり「おほきおとゞ」（公経の長男実氏）が許さなかった。その二十数年後、息子の実材に先立たれた時にも、「かゝるついでにも、そむかまほしきを、心ならぬあしわけにてすぎ行」（四六）とあるように、障害が多く素志を果たせなかった。出家を敢行できなかった事情は詳しく書かれていないが、夫親清や他の多くの子供たちが絆となったであろうことは想像がつく。

それに比べて、この時点では夫の親清はすでに亡くなっているし、子供たちもそれぞれ独立しているようだから、さほど障害はなかったのだろう。また、出家の直接の契機が病であったことも、記しているとおりであろう。しかしその病気自体、長女の死にひどく心を痛めたことが主な原因だったのではないか。生死に関わる重病に陥った上、ついに出家を実行せざるを得ないほど、作者にとって長女の死は、これまで経験したどの死別よりも大きな衝撃だったのだと思われる。

実材母と長女との間に「かたみにうらむる事」が生じる以前、二人は非常に仲のよい母娘だった。歌群A～Cには、二人の仲睦まじい交流を伝える贈答歌が多く見られる。まず、正月の若菜摘みをはじめ、折々の行事につけて、互いの長寿を祈る歌を頻繁に詠み交わしている。一例を挙げると、ある年の端午の節句には、まず長女の側から、

ながきねをひくしらいとのくりかへしちよのさ月は君のみぞへん（九九）

と母の長寿を予祝したのに対し、母も、

としをへてちよの五月のながきねは君もろともにかけてこそみめ

と返している。　（一〇〇）

また、実材母は二人の息子と夫親清に次々と先立たれたわけだが、そのたびに母の悲しみを思いやって慰めの歌を贈っていたのも、やはりこの一番年上の娘であった。たとえば親清の死後間もなく、実材母が前栽の竹の風に吹かれる音を聞いて、

かれはてしかたえのこれるくれ竹のそよぐをとにもねこそなかるれ　（一八二）

と、夫に取り残された心細さを訴えるのに対し、長女は、

かれのこるかたえばかりのくれたけをあはれちよもとなをいのるかな[21]　（一八三）

と、一人になってしまった母親のさらなる長寿を祈り、慰めている。息子たちにも夫にも先立たれた今、実材母にとって、本来ならば長女は最もよき相談相手となり、頼りにすべき娘だったはずである。

その長女が突然、死に目に会うこともできないまま世を去ってしまった。しかも、母娘の間の「かたみにうらむる事」を引きずったままの死別だった。さらに、おそらくその自分との確執が原因で、娘の魂は冥途をさまよっているらしいとなれば、作者は娘を失った通常の嘆き悲しみに加えて、後悔や自責の念にさいなまれることも多かったにちがいない。重い病も、そうした思いが積み重なった結果なのではなかろうか。作者がここに至ってついに出家を遂げた背景には、長女の死に関してこうした特殊な事情があったことを押さえておくべきであろう。

五　哀傷歌集の成立

続いて歌集を読み進めてゆく。やがて時は流れ、長女の三回忌がやってきた。[22] その三回忌に際して、作者は悲しみにもつれなく今まで生き長らえてきた命を恨む歌を詠んだ。

ほどなくみとせにもなりぬ、うかりしおなじ月日にもめぐりあひぬれば、いのちながさのいとうく覚侍て[23]

おもひきやうきにたへたるいのちにてみとせの春にあはんものとは　（二九一）

この次の二九二・二九三が、先に見ておいた弁内侍との贈答歌である。おそらく作者は、長女の三回忌を機に哀傷の歌々を整理し、歌群Dの二九一までの形で弁内侍に見せたのだろう。それは、出家という人生の大きな転機を経て、不本意にも生き長らえているとはいえ、もう人生も終わりに近いことを感じたがゆえの営みだったのかもしれない。

その小歌集は、長女への追悼を主題とする。しかし、娘の死を嘆き悲しむ歌に終始せず、その前に東国への道中の歌を置いたのは、その旅の理由がすなわち、長女との間の「かたみにうらむる事」そのものだったからであろう。二人の仲違いが具体的にいかなるものであったのかわからないが、実材母が長女の死を悼む思いの中には、和解できないまま娘を死なせた、しかも死後の魂まで迷わせてしまったことへ

の後悔や自責の念が、常に混じっていたことと思われる。それは作者を病にかからせ、出家に追い込むほどのものだった。だからこそ、長女哀傷の歌集を編むにあたって、自らの罪滅ぼしの意味でも、また娘の鎮魂のためにも、「かたみにうらむる事」があったという事情について、全く触れずに済ますことはできなかったのではなかろうか。

しかし、先ほども述べたように、女性が、しかも歌集のような形式において、訴訟の経緯を詳しく書き留めることなどまず不可能である。あるいはそれ以前に、作者の心情として、生前の長女との不和は、直叙するにはあまりにもつらい思い出だったのかもしれない。その代わりに置かれたのが、旅中の詠である。そこでは「思ふこと」「うらみ」といった語が繰り返し用いられ、長女との間の「かたみにうらむる事」の内実をそれとなく語っていたのである。

一見したところ、前半の旅の歌と後半の哀傷歌との間に断絶があるように思われる歌群Dだが、実は、親子の確執を引きずったまま世を去った長女を悼むという、一つのテーマのもとにまとめられていたのである。孤立しているように見えた冒頭の一首も、訴訟を暗示することで序の役割を果たしていた。『源氏物語』幻巻を髣髴とさせる展開といい、単にある時期の詠歌を集積しただけではなく、構成を工夫し、小規模ながら歌集として十分鑑賞に堪える形に整えた上で、親しい歌詠み仲間だったらしい弁内侍のもとに届けたのである。そしてそれを読んだ弁内侍は、作者の込めた万感の思いを酌み取って、「あはれ」との感想を寄せたのだった。

ただし、歌群Dはこの弁内侍との贈答で終わるのではなく、その後にもう一首、作者が母親の墓に詣でた際の歌が置かれている。

は、のはかにて
わが身さへきえなんのちははゝそはらつゆのあはれもたれかかくべき　（二九四）

娘の自分までが死んでしまったら、その後は誰が亡き母を偲び、少しでも「あはれ」をかけてくれようか、というこの歌は、置かれた位置からして、長女哀傷の小歌集を編んで弁内侍に見せ、それにまつわる贈答歌を交わした後に追加されたものと思われる。では、一体いかなる意図でここに追加されたのであろうか。

この二九四の歌から思い起こされる歌が一首、歌群Dの中にある。長女が亡くなった年の盂蘭盆会の前夜に詠んだ、二七二である。

七月十四日夜、火ともし侍るとて
おもひきやわれぞこよひはとはるべきのりのともし火かゝぐべしとは　（二七二）

作者は亡き娘のために燈明を捧げながら、本来ならば自分の方が先に死んで娘に供養してもらうはずだったのに、思いがけず逆縁となってしまった不幸を嘆いていた。このように、最も頼りになるべき娘であり、自分の後生を弔ってくれるはずだった長女を失うという悲痛を経たからこそ、作者自身が大病を患って出家まで遂げ、命も終わりに近いことを意識した時、すでに亡き自らの母への思い、自分が死んだら誰が母を弔うのかという思いが改めて湧き起こってきた、その思い

の発露が二九四の歌となったのではなかろうか。つまり、二九四は作者が長女の死を嘆き尽くした末にたどりついた感慨を詠んだ歌であり、それゆえこの長女哀傷歌集の最後に、一種の跋のような役割をもって置かれているものと解されよう。

と同時に二九四は、『実材母集』全体の巻頭とも呼応しているように見える。この歌集の巻頭歌は、作者が母危篤の知らせを受けて伊予へ下った際に詠まれたものだったからである。[24] それが作者自身の意図した構成であったのかどうかは、成立の問題と絡んで断言できないが、歌集にとっても作者の人生にとっても、この歌が一つの大きな節目であったことは確かだろう。

長女哀傷の歌群はここで終わっているが、実材母はその後も十年ほどは生きていたと推定されている。晩年には、「おとゝむすめ」と呼ばれていた、次女か三女にあたる娘にも先立たれている。生涯にわたって夫や子供たちとの死別を何度も経験してきた作者だが、その中でも長女への哀惜の念はやはりとりわけ強かったようで、これ以後も長女を偲ぶ歌をいくつか残している。

たとえば、四季・恋・雑の部立構成をとる歌群Ⅰは、詞書のない歌が大半を占める歌群なのだが、その中で例外的に長い詞書を付された五四八は、長女遺愛の萩を見ての詠であった。生前の長女は、春の花に限らず、よほど草花を愛する人だったのだろう。

なくなりにしあねむすめ、みやぎの、はぎをうつしうへたりしが、つねよりも色こき夕ばへを、ひとりみるにも、涙の露のとかなしければ

うへをきし人のかた見とみやぎ野、こはぎが露にぬる、袖哉　（五四八）

してみれば、歌集末尾の釈教歌群Ⅰ③にある、「南無阿弥陀仏の七首の歌」と題された七首のうち第一首、

なき人のうへしさくらのこのもとにあはれもつもる花のしらゆき　（八七六）

もやはり、長女の冥福を祈って、その形見の桜を詠んでいたのだろうか。

また、歌群Ⅰの雑部には、長女が亡くなってから八年目の春、作者と残りの娘たちの交わした贈答歌が収められている。

あね身まかりて、やとせになり侍し春、さくらの花につけて

をこせて侍し、おなじむすめ

つれなくもやとせの春にめぐりあひてちりにし花のあとをとふかな　（六八〇）

又、きむかんの枝を、こすとて

これもまた花たちばなによそふればむかし恋しきつまとならずや　（六八一）

返し

めぐりあふやとせのはるの花みればちりのこりける我ぞつれなき　（六八二）

たち花のにほふむかしによそへてもこれやかたみの袖ぞしほる、　（六八三）

六八〇の「おなじむすめ」は、四女を指す。四女と作者との応酬に続いて、「おと、女」が唱和した歌もある（六八四・六八五）。さらにその後、二首おいた六八八・六八九は、先に挙げたように、長女がある人の夢に現れ苦しみを訴えた歌と、それを伝え聞いた作者の詠であった。これに対しても、同じく「おと、むすめ」が返歌を詠んでいる（六九〇）。

さらに、五女の家集『平親清五女集』[25]甲本にも、「うせにしあねの十三年の仏事し侍りし日」と題する、次のような歌がある。

おどろかすとをとみとせのかねのをとになをさめやらぬ夢のはかなさ　（三九八）

このように、長女の死は、後年まで多くの家族によって追憶されている。もともと非常に仲の良かったこの一家において、長女が母との諍いを抱えたまま突然世を去ったことは、当の母はもちろん姉妹たちにとっても、相当大きな衝撃だったのだろう。

おわりに

以上、『実材母集』の長女の死に関する歌々を見てきた。現状の『実材母集』は、いくつかの歌群を寄せ集めて構成されたという印象が強く、全体的としての統一性に欠けることは否定できない。しかし、個々の歌群の中には、作者自身が歌集としての編纂意識をもって自詠を整理したと思しきものもあり、そうした小歌集を編んで歌人仲間と見せ合うというという営為を、作者は生涯の折々に行っていたらしい。その中でも、本稿で取り上げた歌群Dは、不和を解消できぬまま悔いの残る死に別れ方をした長女を悼むという、一貫したテーマのもとにまとめられ、歌日記に近い性格も持っており、小品ながら歌集として十分鑑賞するに堪える作品となっているように思われる。

初めに述べたように、『実材母集』は、中世の私家集には珍しく、私的な生活に即した詠歌を数多く記しとどめている。その一方で、百首歌・続歌などの題詠歌も少なくなく、両者併せて、この時代の女性の和歌活動を窺うに有益な資料である。作者の伝記等の考証とともに、歌集自体の読みを深めていくことが求められよう。

また、本稿で推定したように、実材母の東国下向が訴訟のためだったとすると、『十六夜日記』との関係も興味深いところである。井上氏の考証によれば、実材母の旅は建治二、三（一二七六、七）年頃と推定されており、弘安二（一二七九）年の阿仏尼より二、三年早いことになる。実材母の方が先行すると仮定して、果たして阿仏尼はそうした実材母の行動を知っていたのだろうか。また知っていたとすれば、実材母の行為や作品から何らかの影響を受けることがあったのだろうか。現時点ではすべて憶測の域を出ないが、実材母は西園寺家とつながりがあり、当時有数の歌人たちとも交流があったようだから、その可能性は考えられてもよいだろう。強い意志と行動力で我が子のために継

子と争った阿仏尼と、実子と衝突し和解できぬまま先立たれた実材母と、同じ時期に同じような行動をとった二人の母親の作品を対照してみることも、有意義かと思われる。

〈注〉

（1）桂宮本叢書第十巻（養徳社、一九五八年）。その後、私家集大成・新編国歌大観にも翻刻されている。引用は私家集大成による。ただし表記を改めたところがある（以下同じ）。

（2）寺本直彦『源氏物語受容史論考』（風間書房、正編一九七〇年・続編一九八四年）、部矢祥子「実材母と西園寺公経」（『龍谷大学大学院研究紀要』第十集、一九八九年三月）・「『実材母集』に見られる我が子実材に対する思いについて」（『中世文学論稿』第十二号、一九八九年三月）・「『実材母集』における平親清に関する歌群考」（『中世文学論稿』第十三号、一九九〇年三月）など。

（3）一連の論考が『鎌倉時代歌人伝の研究』（風間書房、一九九七年）にまとめられている。以下、井上氏の所説は同書による。

（4）森幸夫「御家人佐分氏について」（『金沢文庫研究』第二九三号、一九九四年九月）。

（5）いずれも桂宮本叢書第十巻・私家集大成・新編国歌大観に翻刻。

（6）『中世歌書集』（古典文庫、一九八一年）・新編国歌大観に翻刻。

（7）私家集大成の解題により書誌を略記すると、上下二冊、縦二四・一㎝、横一六・七㎝。鳥の子紙、列帖装。外題「権中納言実材卿母集上（下）」は霊元天皇宸筆。江戸初期写。

（8）引用は新編国歌大観による。底本の九州大学図書館蔵本には引用箇所に欠脱があり、他本によって補われたものである。

（9）参考―いかにしていかにしらましいつはりを空にただすの神なかりせば（枕草子・宮にはじめてまいりたるころ）

（10）参考―老の波かひある浦に立ち出でてしほたるるあまを誰かとがめむ（源氏物語・若菜上）

（11）本歌集の冒頭に、伊予の三島社で詠んだ歌がある。

ながつきのころ、はゝかぎりにわづらふよしつげて侍りしかば、にはかにいよへくだりてはべりしついでに、みしまのやしろにまうでてはべりて

みたらしやせゞになみたつはしぐらたのみぞわたるこけのむすまで　（一）

たちかへりまたいつかはと見たらゐの心にかゝるなみのゆふしで　（二）

（12）「祈願の旅」（『文芸論叢』第二十五号、一九八九年三月）。

（13）引用は新日本古典文学大系による。

（14）これ以前にも、作者は夫親清に伴われて鎌倉に下ることがあったらしい（三二など）。「むかしすみなれ侍しふるさと」とは、その折に滞在した家を指すか。

（15）「田子浦」に「子」を掛ける例には、『宇津保物語』忠こそ巻、忠こその出奔を嘆く父千蔭の歌「しらなみのまさごをすすぐたごの浦にお

くれてなぞもなげく舟人」などがある。

(16) 当歌は、『新後撰集』に「ぼにのころ、仏の御まへにさぶらひて思ひつづけ侍りける／平親清女」（釈教・七一二）として収載。「おなじ夜」は、前歌の詞書によれば「七月十四日夜」。

(17) 「あね」は傍記補入。

(18) 引用は新潮日本古典集成による。

(19) 哀傷歌群中、『源氏物語』の影響は、次のような例にも見られる。

うらみてもかすみの衣たちかへりなをはれやらぬわがなみだかな　（二二七）

このもとのはなのしづくにぬれ〳〵もした葉〻のこる春ぞかなしき　（二四九）

※木の下の雫に濡れてさかさまに霞の衣着たる春かな

うらめしや霞の衣誰着よと春よりさきに花の散りけむ　（柏木・五―三一一～二頁）

人のくに、ありけん、かうのけぶりもがなとぞおぼえける

おもかげのたつらんかうのけぶりだにたえてかなしきわが思ひかな　（二三二）

※人の国にありけむ香の煙ぞ、いと得まほしくおぼさるる。　（総角・七―九四頁）

(20) 参考―心こそ憂き世の岸を離るれど行方も知らぬあまの浮木を（源氏物語・手習）

(21) 参考―世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もといのる人の子のため（伊勢物語・八十四段、古今集・雑上・九〇一・業平・第四句「千世もとなげく」）。

(22) 井上氏はこれを親清の三回忌としておられるが、その解釈は、二二三の「みな月」と二二六の「やよひ」が同年である、つまりそこだけ時間的に遡って配列されているという前提に基づいており、配列どおり二二六を二二三の翌年とすると計算が合わなくなる。この歌集がおおよそ編年体構成であることを考慮し、また歌群Dのここまでの流れを重視して、やはり長女の三回忌と解しておきたい。

(23) 参考―命長さの、いとつらう思うたまへ知らるるに…（源氏物語・桐壺）

(24) 注(11)参照。なお、この呼応関係は、前掲注(2)部矢氏論文「『実材母集』における平親清に関する歌群考」において指摘されている。

(25) 甲乙二種の伝本があり、いずれも宮内庁書陵部所蔵。引用は私家集大成による。

※特に注記したもの以外、和歌の引用は新編国歌大観による。